

平成23年度

徳島大学病院卒後臨床研修カリキュラム

小児科カリキュラム

## I. 目的と特徴

小児科研修では、徳島大学病院卒後研修プログラム中の経験すべき疾患のうち小児疾患の症状、病態、治療法を理解し、実行することを目的とする。

小児医療は新生児、乳幼児、学童及び思春期の小児の健康上の問題を全人的に把握することを基本として、その対象疾患は、急性・慢性疾患、新生児固有の疾患、先天性あるいは遺伝性疾患、心因性疾患、行動発達の異常である。また、小児の健康保持とその増進及び疾病・障害の早期発見とそれらの予防の役割を担う。

徳島大学小児科では、新生児、小児腎臓病、膠原病、小児循環器、小児血液・腫瘍、小児神経疾患、てんかん、発達障害、心身症、内分泌・代謝疾患などについて多数の専門医が直接指導にあたっており、小児科疾患全般をバランスよく研修することができる。

## II. 研修責任者

香美 祥二 教授

(小児科専門医、日本腎臓学会認定専門医(小児科)、日本腎臓学会認定指導医)

## III. 運営指導体制および指導医数

教授1名、病院教授1名、准教授1名、講師2名、助教6名、医員6名。

研修医1名につき、1人の指導医が選任され、入院患者の診療を共同で行う。小児科専門医は14名、日本腎臓学会認定専門医は2名、日本腎臓学会認定指導医は2名、小児神経科専門医は1名、日本てんかん学会臨床専門医は1名、小児循環器指導医は1名、周産期新生児学会指導医は1名、日本血液学会認定血液専門医は1名、日本がん治療認定医機構がん治療認定医は1名、infection control doctor (ICD) は1名、指導医講習会修了者数は5名いる。

## IV. 臨床実績

外来患者数は約100人/日、新生児(NICU・GCU)入院患者数は約200人/年、小児科入院患者数は約400人/年である。診療内容は感染症、アレルギー性疾患などの一般的な小児科疾患はもとより、腎臓病、膠原病、心臓病、血液・腫瘍性疾患、神経疾患、心身症、内分泌・代謝疾患性疾患、新生児疾患、予防接種などに関して専門外来を設け積極的に診療を進めている。特に腎疾患患者の腎生検による組織診断は約40例/年、行っている。また、心臓病に対しては、カテーテル検査約70例/年、カテーテル治療約35例/年、施行している。てんかん患者に対する長時間脳波ビデオ同時記録は約50例/年、行っている。難治性の血液

疾患や悪性腫瘍に対しては、造血幹細胞移植を積極的に行っている。その他、代謝疾患に関する遺伝子診断、心身症に対する心理療法、発達障害に対する療育指導など幅広い診療を行っている。

## V. 研修目標

### 一般目標

- 1) 患児及びその養育者、特に母親との間に好ましい人間関係を作り有用な病歴を得ることが出来る。
- 2) 患児の全身を包括的に観察し、年齢的特性を理解して診察できる。
- 3) 適切な診療録を作成できる。
- 4) 小児科診療、特に小児救急医療、先天的あるいは遺伝的要因に基づく疾患治療に必要な基礎的知識・問題解決方法・基本的技能を修得する。
- 5) チーム医療の原則を理解し、他の医療メンバーと強調できる。
- 6) 入院中であっても出来るだけ教育の機会が損なわれないための配慮を理解し、また、それを支えるスタッフとの交流を持つ。

### 行動目標

#### <小児の救急医療>

- ・ 小児に多い急性疾患の基本的知識と対処手技を身に付ける。
- ・ 全身症候（発熱、脱水、浮腫、発疹）の程度を判断でき、鑑別診断と応急処置ができる。
- ・ 喘息発作の重症度を判断でき、中等症以下の病児の応急処置ができる。
- ・ けいれん、意識障害の鑑別診断ができ、応急処置ができる。

#### <医療面接・指導>

- ・ 小児ことに乳幼児に不安を与えないように接することができる。
- ・ 保護者（母親）から診断に必要な情報、子どもの状態が普段とどう違うか、違う点はなにか、などについての的確に聴取することができる。
- ・ 保護者（母親）に指導医とともに適切に病状を説明し、療養の指導ができる。

#### <基本的手技>

小児ことに乳幼児の検査および治療の基本的な知識と手技を身につける。

#### A：必ず経験すべき項目

- ・ 指導者のもとで乳幼児を含む小児の採血、皮下注射ができる。
- ・ 指導者のもとで新生児、乳幼児を含む小児の静脈注射・点滴静注・輸液ができる。
- ・ パルスオキシメーターを装着できる。

#### B：経験することが望ましい項目

- ・ 指導者のもとで導尿ができる。
- ・ 浣腸ができる。指導者のもとで、注腸・高圧洗浄ができる。

- ・ 指導者のもとで、胃洗浄ができる。
- ・ 指導者のもとで、腰椎穿刺ができる。

<研修すべき疾患>

a. 新生児疾患

低出生体重児、新生児黄疸

b. 乳児疾患

おむつかぶれ、乳児湿疹、乳児下痢症、白色下痢症

c. 感染症

発疹性ウイルス感染症：麻疹、風疹、水痘、突発性発疹、伝染性紅斑、手足口病

その他のウイルス性疾患：流行性耳下腺炎、ヘルパンギーナ、インフルエンザ

急性扁桃炎、気管支炎、細気管支炎、肺炎

d. アレルギー性疾患

小児気管支喘息、アトピー性皮膚炎、蕁麻疹

e. 神経疾患

てんかん、熱性けいれん

f. 腎疾患

尿路感染症、ネフローゼ症候群、急性腎炎、慢性腎炎

g. 先天性心疾患

先天性心疾患、心不全

h. リウマチ性疾患

若年性関節リウマチ、全身性エリテマトーデス、川崎病

i. 血液・悪性腫瘍

小児がん、白血病、貧血、血小板減少性紫斑病

j. 内分泌・代謝疾患

糖尿病、低身長、肥満、甲状腺機能低下症（クレチン病）

k. 発達障害・心身医学

精神運動発達遅滞、自閉症、注意欠陥/多動性障害、心身症

小児の急性・慢性疾患の外来・入院治療に関わり、診断確定のための種々の検査、診断及び治療方針について検討し、症例レポートを作成する。これらの疾患の治療に関わることにより、厚生労働省の定める到達目標のうち、小児科研修で求められる基本的検査法および基本的治療法、とくに小児救急医療を修得するよう努力する。

## VI. 研修内容

一人の指導医に密着して研修するマンツーマン方式と、一定の時間に特定の指導医の指導を受ける時間枠方式を併用する。

#### 1) 救急診療

主には外来で小児科救急患者への対応と治療に関わる。希望者は、夜間当直を指導医と共に経験する。

#### 2) 外来診療

新患患者の予診を取り、本診察に立ち会い、カルテに記載し、診察終了後に診察医と質疑応答する。出来る限り、その患者の再診にも加わり経過を観察する。特に乳児検診や予防接種の知識を身に付ける。

#### 3) 入院診療

入院診療はマンツーマン方式で行う。指導医師の担当する患者の副主治医となり、毎日診察し、検査所見を解釈し、指導医と相談協議しながら、治療方針を決定する。患者と家族に治療方針や症状の推移を説明する。担当入院患者の入退院に際しては、その症例の要約を作り、今後の問題点等について討議する。

#### 4) 教育に関する行事

小児科全体の症例検討会、診療グループの病棟カンファレンスなどに参加する。また、研修医のための特別メニューの勉強会を行う。その他教育に関する学内外でのセミナーに参加する。

これらの実地研修を通し、臨床医として必要な小児疾患の診断と治療に関する知識と技能を習得する。また、小児医学的診察の体験から、患者を全人的にとらえる習慣を身に付ける。

### VII. 研修スケジュール

各種小児科疾患患者を担当する。受け持ち入院患者の検査、治療には責任をもってあたり、症例検討会、教授回診では、症例提示を行う。小児科外来においては診察に立ち会った患者に関して、鑑別診断、治療法などについてレポートを提出する。

病棟回診	: 月曜日～金曜日	午前、午後
外来研修	: 月曜日～金曜日	午前
教授回診	: 月曜日	午後 1:30～
病棟カンファレンス	: 月曜日	午後 5:30～
リサーチカンファレンス	: 火曜日	午後 5:30～
症例検討会	: 水曜日	午後 5:30～

### VIII. 評価法

研修責任者と指導医が研修態度、症例提示、提出レポート、患者さん・家族・スタッフへの対応、知識・技術の習得度などを総合的に評価し、研修終了時にフィードバックする。最終的評価はオンライン臨床研修評価システム（EPOC）を用いて行う。